ゲルバー、最後の来日公演決定！
代名詞のベートーヴェンで、有終の美を飾る

数少ない現代の巨匠ピアニスト、ブルーノ＝レオナルド・ゲルバー。今回が彼の最後の来日公演となってしまうのは本当に寂しい限りだが、これも時の流れなのだろう。
だが技術ばかり先行する現代のピアノ界にあって、湧き上がる情感をそのまま音楽にするそのスタイルをこよなく愛する我々ファンにとって、この特別な公演に代名詞たるベートーヴェンの作品が並んだことは、この上ない喜びだ。幼いときに重い小児麻痺にかかりながらも不屈の精神で鍛練を重ね、その後の輝かしい経歴を築き上げたゲルバーほど、ベートーヴェンの情感を強く、生々しく表出できるピアニストはそういるものではない。
そんなゲルバーのベートーヴェンをここ日本で直接聴けるのが最後になると思うとつくづく残念でならないが、だからこそ今回は、いつも以上に心して聴きたい。

ブルーノ＝レオナルド・ゲルバー
Bruno Leonardo Gelber,Piano

現代を代表する世界的ピアニストのひとり。オーストリア、フランス、イタリアの血を引く音楽家の両親のもとアルゼンチンに生まれ、5歳でアルゼンチンでの初めての演奏会を行う。6歳で名教師スカラムッツァに師事。翌年ゲルバーは重い小児麻痺にかかり、1年以上寝たきりの生活を送ったが、両親はベッドの上でも弾けるようにピアノを改造、練習を続けた。
15歳の時、マゼール指揮でシューマンの協奏曲を演奏。19歳でフランス政府の奨学金を得てパリに留学。演奏を聴いたマルグリット・ロンは「あなたは私の最後の、しかし最高の生徒になるでしょう」と語り、1961年のロン＝ティボー国際コンクール第3位入賞時には、彼こそ優勝にふさわしいとする聴衆とマスコミの間で大いに物議を醸した。
それ以後、華々しい活動を展開し、世界の主要都市でリサイタルを開催すると共にベルリン・フィル、パリ管、ロンドン響、ニューヨーク・フィルなど主要なオーケストラにも数多く招かれ続けている。
日本には1968年に初来日して以来、しばしば来日しており、2018年には日本初来日から数えて50周年を記念するツアーを行い健在ぶりを示した。
今回のツアーは80歳記念ツアーとなる。
フランスのディアパソン誌は、ブルーノ＝レオナルド・ゲルバーを今世紀の最も偉大な百人のピアニストの一人に選んでいる。

《オール・ベートーヴェン・プログラム》
ピアノ・ソナタ
「月光」
「ワルトシュタイン」
「田園」
「熱情」

BRUNO LEONARDO GELBER
LAST CONCERT IN JAPAN